

# うど早期出荷の休眠打破法

## 1. 試験のねらい

県北特産うどの出荷時期は1月から4月であるが、年内まで早めることによって有利販売が期待できる。しかし、年内出荷をする場合は、休眠による収量や品質の低下が問題となる。

そこで、年内出荷の安定化を図るため、根株養成の標高、ジベレリン及び低温処理などによる休眠打破について検討した。

## 2. 試験方法

### (1) 根株養成の標高

根株養成は標高200m(大田原市)、345m(黒磯市)及び800m(塩原町)で行い、10月中旬以降12月上旬まで順次掘り取って、根株1kg当たりGA100ppm液を20ml噴霧後伏せ込んだ。

### (2) ジベレリン処理

GA処理法はどぶ漬け及び噴霧、GA量は根株1kg当たり6年度が2、4及び6mg、7年度が3、6及び9mgで検討した。根株は大田原産を用い、6年度は12月2日、7年度は11月30日に伏せ込んだ。

### (3) 低温処理

6年度は0~24日間、7年度は0~27日間約1℃の冷蔵庫で低温処理した。根株は大田原産を用い、GAは低温処理前に根株1kg当たり100ppm液を20ml噴霧した。伏せ込みは、6年度が11月21日、7年度が11月30日に行った。

## 3. 試験結果および考察

### (1) 根株養成の標高

休眠の最も深い時期は、塩原では11月中旬~下旬、黒磯では11月下旬~12月上旬、大田原では12月上旬~中旬と推察した。休眠の最も深い時期までの低温遭遇量(5℃以下)は、300~400時間であった。なお、塩原株は根株重量及び芽の肥大などが優れた(図-1、2)。

### (2) ジベレリン処理

軟化うどの生育はGA処理間ではどぶ漬けが優り、GA濃度はどぶ漬けの場合225ppm(GA量9mg)が優った。休眠明けの遅い大田原株でも、高濃度処理することで年内出荷が可能であった(図-3、4、5)。

### (3) 低温処理

軟化ウドの生育は低温処理により促進され、処理期間は10~15日で十分であった。GA100ppm液20ml噴霧(GA量2mg)+低温処理の休眠打破効果は、GA300ppm液20ml噴霧(GA量6mg)と同程度であった(図-6、7、8)。

## 4. 成果の要約

根株の養成は、標高の高いほど休眠明けが早く、収量及び品質も優れた。大田原株の休眠打破には、根株1kg当たりGA225ppm液のどぶ漬け処理(GA量9mg)、または、低温処理10~15日間+100ppm液の20ml噴霧(GA量2mg)が有効であった。

(担当者 黒磯分場 村上文生\*) \*現農業大学校

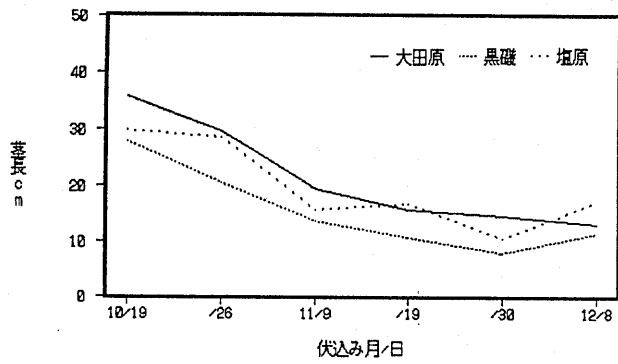


図1 根株養成の標高と軟化ウツの生育(平7)

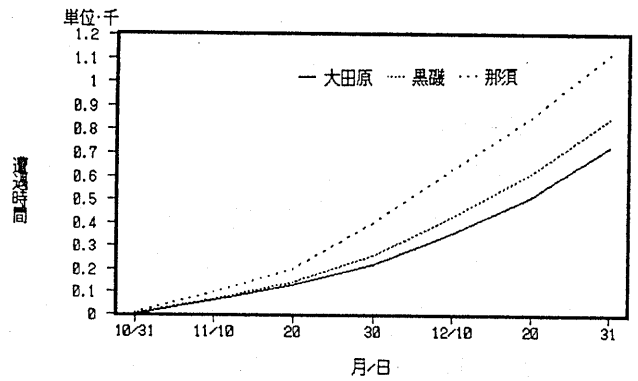


図2 根株養成の標高と低温遭遇量(平7.5°C日)

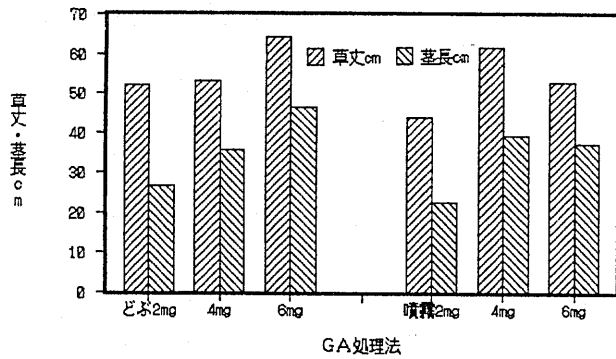


図3 GA処理法と生育(平6) (12/2伏込み、12/26収穫)

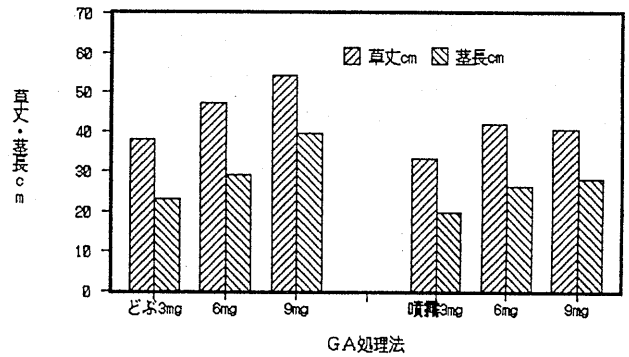


図4 GA処理法と生育(平7) (11/30伏込み、12/26収穫)

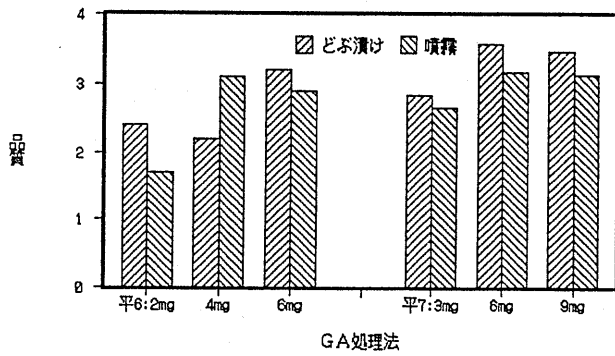


図5 GA処理法と品質(平6.7) (4:良, 3:中, 2:やや不良, 1:不良)

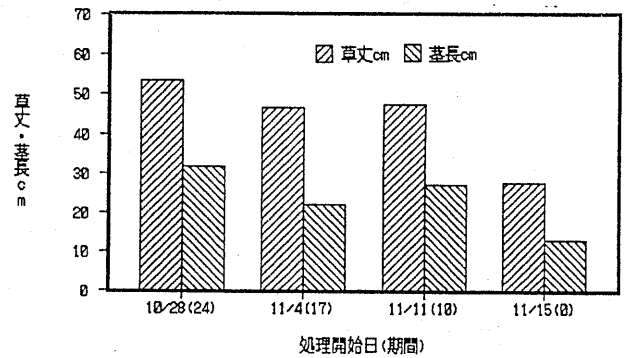


図6 低温処理と生育(平6) (11/21伏込み、12/26収穫)

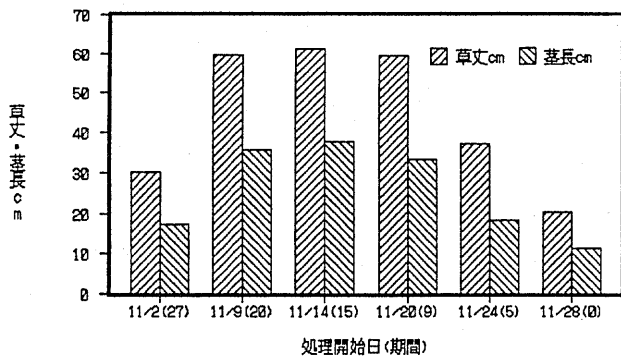


図7 低温処理と生育(平7) (11/30伏込み、12/26収穫)

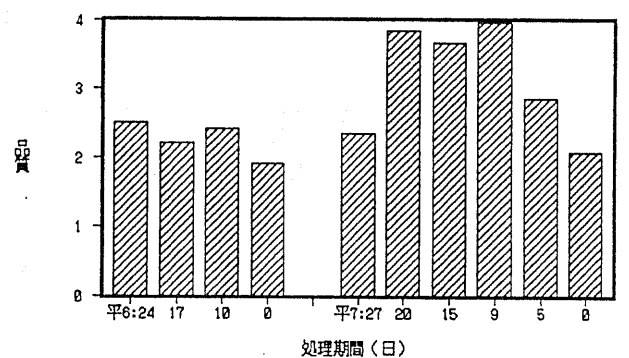


図8 低温処理と品質(平6,7) (4:良, 3:中, 2:やや不良, 1:不良)